



毎月十五日発行 所 社 会
発 行 所 大 像
宗 像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311(代)
定価 一年送料共 1000円

大祓式・夏越祭斎行



に列立した。
この大茅輪は、当日早朝より多数の田島地区、地元功方の方々の奉仕によって、刈られた茅を直径約五メートルにも及ぶ大輪に奉製されたものである。また大茅輪の前には、全国各地の崇敬者の方々から寄せられた、紅白人形(人間の身代わりとして用いられ、各自の名前が記され息の吹きかけられたもの)や切麻、祓物(はらえつもの)が案上に置かれた。

七月三十一日、夕刻といえ真夏の強い日差しが照りつける午後五時より、当大社恒例祭典である夏越大祓式が、古儀に則り厳粛裡に斎行された。

大祓式は、奈良時代の昔より国家的祭事として神祇官の命により、全国津々浦々の神社で年一回行われてきた伝統ある儀式である。各々旧暦の六月と七月の晦日に行われ、半年のうちに知らず知らずのうちに犯した罪や穢れを祓い浄め、新た

な心で日々を過ごして頂く。六月の大祓式は夏越の大祓(名越・六月祓・荒和の祓ともいわれる)とも呼ばれ、応仁の乱に於ける神事、祓が途絶えた際にも、民間では盛んに行われていた。当大社では新暦、月遅れの七月三十一日に大祓式を行っている。

祭典は先づ、神職より参列者へ切麻の入った紙袋が配られた。次いで升谷祢宜が、大祓詞を朗々と宣読している。真神の大祓で天・地・人形が祓い浄められた。また、参列者は各自切麻で身体を祓い、祓物と呼ばれる白布に息を吹きかけつつ切り裂

き、罪穢れを祓い去った。次に、先頭を大所役が天地を祓いながら茅の輪をくぐり、続いて太田権宮司以下全員が、古歌を奉唱しつつ大茅輪をくぐった。先づ、左廻りに、次に右廻り、更に左廻りに三度輪をくぐる。「みなつきの夏越の祓へする人は千歳の命延ぶといふなり」「思ふこと皆つきねとて麻の葉を切り切り切ても祓へつるかな」

宗像警察署では七月二十四日午後一時から夏の交通安全キャンペーンを宗像市三郎丸で行った。当大社からも神職一名と巫女三名が出向し、ドライバー達に安全運転を呼びかけた。

このキャンペーンは、海水浴シーズンに入り、海水浴客で交通量の増加すると同時に、暑さで、つい気もゆるみがちになりやすいこの時期に行っている。当日も宗像警察、宗像交通安全協会、宗像タクシー部会の人々と一緒に、清流飲料水をマイシユペーパー、

「御礼」
当大社恒例の夏越祭神事斎行に当たりましては、宗像市郡内氏子各位並びに全国崇敬者の皆様より、多数の人数をお寄せいただき、お蔭を以ちまして、祭典も盛大裡に斎行致すことが出来ました。ここに謹んで御礼申し上げます。

奉納袋配布並に取纏め御礼
平成九年度、宗像大社夏越大祓式斎行にあたり、市郡氏子各位への奉納袋配布並に取纏めにつきましては、猛暑の中御協賛を賜り深く感謝申し上げます。祭典は例年にもまして盛大厳肅に斎行致すことが出来ました。茲に謹んで厚く御礼申し上げます。

宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守
宗像大社 宮司 養父 守

交通安全

キャンペーン

安全運転啓蒙用チラシと共同、当大社のお守りとステッカー守を授与、運転マナーの向上を訴えた。

最初は誘導する警察官を見て、検問と間違ひ、あわててシートベルトを締めていたドライバーも見受けられたが、当社の巫女等が「おっかれします。安全運転でお願いします」と声をかけると、ほっとした表情で気持ちも新たに、ハンドルを握り慎重に走り出していた。



行楽地へ出かけるマイカーが増加する季節である。どうか皆さん交通安全マナーを守り、安全運転で、楽しい休日をお過ごしください。

残暑御見舞申し上げます

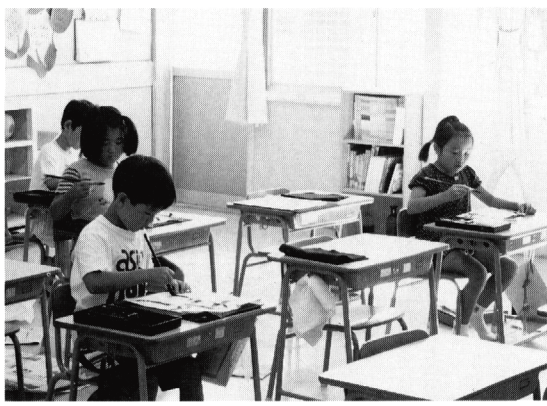
博多の味
味噌せんべい 本舗
博多の四季
有限会社 梅月堂

〒812 福岡市博多区古門戸町1-11
TEL 092-291-2966

「聞く・考える・作る・伝える」ことが、私たちの仕事です。
私たちは「ヘルメス企業体」です。

ギリシャ神話に登場する神・ヘルメスは、翼の生えた帽子とサンダルを身につけ、神々の間を飛び回ってそれぞれの神の意志を伝えました。
より良いコミュニケーションのお手伝いをめざす秀巧社もまた、ヘルメスでありたいと考えます。
お客様が伝えたいことを、伝えたい人にきちんと伝えたい……秀巧社がめざすのは「ヘルメス企業体」です。

shukosha
秀巧社印刷株式会社
営業部
〒810 福岡市中央区渡辺通5-14-9
Tel 092-712-7711 Fax 092-714-1017
http://www.shukosha.com/



筑前大島中津宮の夏恒例行事である、七夕揮毫会(主催)宗像大社中津宮・大島村教育委員会が、去る七月二十四日(木)に開催された。

第四十二回 中津宮七夕揮毫会開催

この揮毫会は、宗像市郡を始め、県内各地の小中学生を対象に昭和三十一年、教育振興を目的として発足。本年度で四十二回を迎えた。この日約百二十名の参加を得、大島小・中学校の二会場に分かれ、幼稚園「クモ」、小学一年「なみ」、二年「ほしぞら」、三年「ほろき星」、四年「夕月の夜」、五年「夏の太陽」、六年「宝満遠望」、中学一年「衛生通信」、二年「天拝観月」、三年「自然保護」の

各課題に、日頃の練習の成果を発揮せんと真剣に浄書していった。浄書を終えた参加者は、中津宮社務所の受付に提出。全作品が揃ったところで中津宮の神前に奉納。参加者一同の書道上達と健康とを祈念しお祝いがなされた。ついで作品の審査が行われ、福岡書道会の城戸筑山先生、船越百鶴先生、松原宏仙先生三名の審査員により審査が行われ、郡市内各々の先生が審査を補助し、厳選な審査の結果、福岡県知事賞以下各賞が選定された。

- 一方審査の間、中津宮照海殿横の海辺で、子供達の海水浴を兼ねて、恒例の「サザエ拾い」が行われ、張詰めた雰囲気から開放された子供達が無邪気に水とたわむれ、水しぶきを上げてながら「サザエ拾い」に興じていた。
- 午後三時すぎ至審査終了、早速金賞以上の作品が中津宮神門脇廊下に展示された。ついで表彰式が行われ、主催者挨拶、松原宏仙先生の講評、次に各賞者へ賞状トロフィーが手渡され、午後四時すぎ今年の七夕揮毫会も無事幕を閉じました。
- 尚各賞の入賞者は左記の通りです。(金賞以下省略)
- 福岡県知事賞：山下 達寛(飯江小3)
- 坂田 直之(八女学院中2)
- 福岡県知事賞：白木 澄歌(自由丘小6)
- 中野 瞳(八女南中3)
- 福岡県教育委員会賞：吉川 裕子(神興小5)
- 常軒 優香(津屋崎中1)
- 宗像大社司馬賞：水田 文華(南郷小4)
- 牧口 隼人(見崎中2)
- 宗像市長賞：稲富 康介(川崎小3)
- 久富紗由美(旭小3)
- 原 由子(南郷小4)
- 梅田 真央(赤間小4)
- 中村 聡子(福島小5)
- 山脇 友美(津屋崎小5)
- 森田 麻衣(二ツ河小5)
- 河原 久美(南郷小6)
- 永嶋 沙織(津屋崎小6)
- 森田 真代(舞原小6)
- 河野 綾(大島小6)
- 中山 利佐(安海中3)
- 東田 える(南郷小1)
- 坂内 朋則(旭小2)
- 陣内 旭小2)
- 白木 聡平(自由丘小2)
- 森 遼平(津屋崎小3)
- 大神 佳菜(東郷小3)
- 東 由衣(旭小3)
- 持丸重里(北山小3)
- 吉丸 まお(大島小4)
- 山脇 康平(津屋崎小5)
- 緒方 智博(旭小5)
- 藤木 智子(志賀東小6)
- 持丸 裕美(光友小6)
- 金丸 真弥(福島小6)
- 吉川 有沙(島崎中1)

梅雨明けの真夏の太陽がカンカンと照りつけている。つい先日までの不安定な梅雨空が嘘のやうだ。今年では六月に一度も台風が来襲、上陸して各地に多くの災害をもたらした。戦後、気象庁の観測が始まって以来の異常気象といふ。七月も雨と猛暑とが交互に繰り返して不安を一層募らせた。

この時期は全国各地で夏祭りがおこなわれる。祭りの国を象徴する季節でもある。無事に田植が終った後の長雨と束の間の五月晴れは、早苗の生育に欠くことのできない自然の恵みである。しかし、自然は決して人間の都合のよいやうにだけ働いてくれるわけではない。時には極めて恐ろしい威力を示す。今年も悲しいかな尊い生命をも奪ふ被害が発生してゐる。

夏祭りの発生については諸説あるがこの季節に全国各地でさまざまな祭りが営まれる心意はよくわかる。なんとか風雨順行し、恵みの多からんことを祈ること切なるものがある。天候不順は秋の収穫に真影響を与へる。またこの時期食物は腐敗し易く、体調を維持することも難しい。鬱陶しい梅雨が去ったと思へば、灼熱の太陽がジリジリと照る。すぐ秋風が恋しくなる。だが、この猛暑が稲の生育にとっては大の恵みである。

雨期と乾期との境目夏祭りはおこなはれてきた。いはゆる「祇園祭り」である。祭られる神は素戔嗚尊である。牛頭天王とも言ふ。夏祭りを単に「天王祭り」とも言ふ由縁である。神仏習合期の縁起書によれば牛頭天王は「其一たけ七尺五寸有、頂に三尺牛頭あり、又三尺のあかき角あり」といふ異相で、天王の苦難の時援助の手をのべた蘇民将来に対しては守護神となるが、これを拒んた玉皇将来に対しては極めて厳しく脅威即死に至るまで「怒覚せよこらすべし」とすさまじい崇神の一面をみせる。だから牛頭天王の怒りに触れたためには六月一日より十五日の間に牛頭天王の御名を毎日七回繰り返して「蘇民将来の子孫也」といふ札をつけなければならないと解く

不安定な夏を乗り切ることのできない。祇園祭りの原流は、平安時代中期に流行した御霊信仰、すなわち怨霊の祟を恐れる処に発した。天災も疫病蔓延もすべて怨霊の祟と恐れられた。そのやうな中で祇園の神は、牛頭天王すなわち素戔嗚尊として悠久の年代から農耕の神を基盤としながら新しい神格を形成し、都市に住む人々の不安を

和らげ、疫神をはらふ威力のある神として生長する。祇園祭りは朝廷の保護を受け、都の祭りとして、祭りの典型としての姿を整へて行く。祭りといへばこの祇園祭りを抜きにして語れない存在となつて行く。全国の夏祭りに及ぼした影響ははかり知れない。千年前の信仰世界では、異常気象や疫病流行は「怨霊の祟」として位置付けられたが、現代社会にあつてはこれをどのやうに説明するのか。昨年来問題となつてゐる大腸菌 O157 による疫病の流行はこの夏さらに大きなものとなるだろう。これは本来は草を食ふべき牛に資料として肉を与へたことから始まったと伝へられてゐる。さまざまな異常気象は、自然破壊のつげであるとも説明され警告されてゐる。現代では「自然の祟」と説明したらいよいよの

現代の不安を乗り切る新たな智慧があるのか。あるいは古人の謙虚な智慧に学ぶべきなのか。千年以上続く神道祭祀の伝統の中に解決の糸口があると思つてゐるが、それを明確にするには我々の一層の努力が必要である。(神社新報)

夏祭りの祈りの中で

みなとタクシー株式会社
代表取締役 古野 浩
宗像市大字土穴三九八一十一
TEL 〇九四〇一三三三一一三三三三

新星交通有限会社
代表取締役 森 正彦
宗像市大字東郷八九四一三
東郷営業所 〇九四〇二二六二二二三八

宗像西鉄タクシー株式会社
代表取締役 出口 典征
宗像市自由ヶ丘二一七一三
TEL 〇九四〇一三二一四一三二一

宗像グリーンタクシー有限会社
代表取締役 藤 瀬 敏
宗像市大字河東一〇六一
TEL 〇九四〇一三三三三三三三三三

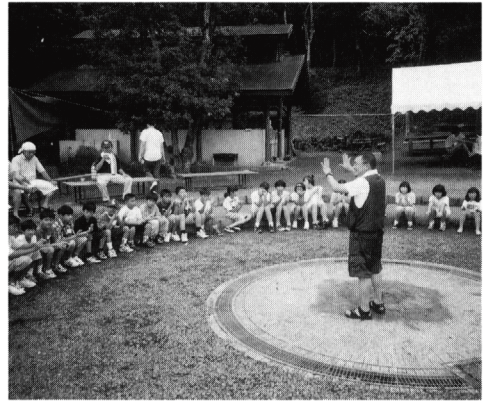
宗像平和タクシー株式会社
代表取締役 塩川 弘昭
宗像郡福岡町二七二八一―一三
TEL 〇九四〇一四二二一〇〇四〇

福栄タクシー有限会社
代表取締役 保 井 久
代表取締役 保 井 享
宗像郡福岡町字東の前二六三三―八
TEL 〇九四〇一四二二一〇三三三三

残暑御見舞申し上げます



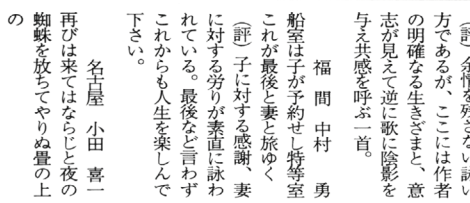
神職氏子弟 夏期学級開催



八月四日、五日の二泊一日にて「神職氏子弟夏期学級」が開催された。この催しは福岡県神事青年会員により、子供達に小さな頃から神社に親しんでもらおうと始まり、今年で四回目になる。

今年には宗像郡津屋町の大峰山キャンプ場を会場に小中学生二十五名参加のもと、午前時に宮地嶽神社に集合し受け付けを済ませて大峰山キャンプ場場々にある東郷神社へと移動。正式参拝の後、早速神社の神拝作法について講話を行うと、子供達は小さな手を合わせながら真面目に講話の教えを受けた。

午後からは海に行き、磯の講習を行った。海を目的にした子供達は磯の作法よりも気持ちは海水浴でいっぱいの子供達で、これには少々気が入らなかった。磯の講習もここで海水



翌朝は六時に起床、洗面を済ませ、先づはラジオ体操、君が代を伴奏に国旗

第四三四回 宗像大社歌会詠草

大野 展男 選
毎月末日、切

田久 井上 光
父若く捨てし故郷の名貼れる砂地西瓜をなつかしみ抱く

評 青雲のころさしを抱き故郷を捨てるよしに出、懸命に働いた父の背中を見ながら今がある作者である。それ故に一入なつかしい故郷の名を冠した西瓜を抱くことでもある。深みのあるいい歌だ。

大島 越智 淳子
戦ひに痛めし足をひきずりて夫はうとめり今年も梅雨を

評 選歌をしている今日八月九日は長崎の五十回目の原爆の日、忘れたことと忘れ得ぬ戦の傷痕がこの一首にも詠ってある。生ある限り戦を憎み、戦を語りつきたいものである。

朝野 藤井 浩子
直く腹を立つるは老の證しとを聞きて呑みこむ一怒りを

評 余情を残さない詠い方であるが、こには作者の明確なる生きざまと、意志が見えて逆に歌に陰影を与え共感を呼ぶ一首。

福岡 中村 勇
船室は子が予約せし特等室これが最後と妻と旅ゆく

評 子に対する感謝、妻に対する労りが素直に詠われている。最後と言わずこれからも人生を楽しんで下さい。

名古屋 小田 喜一
再びは来てはならじ夜の蜘蛛を放ちてやりぬ畳の上止す

評 結句「畳の上」は二句「来てはならじ」に続くもの。夜の蜘蛛に対するやさしい気持が何え、作者の人情が見え作である。

自由ヶ丘 細川 絹子
夕留米耕つる過程を説明の職人の指あおく染みそり

日の里 大和 美田紀
朝日受け清き風に揺れながら蜘蛛の子は散らばりゆけり

庄内 原田 衛
長女逝き二女亦病む老の身の此のわびしさよ誰に語らむ

ひかりヶ丘 藤原みさを
サッカーボールの行方をやさしく少年に問ひ質しめる父の声する

日の里 石松 弘次
合歡むく季節の花はな振りたるを長く病みある妻に届けむ

武丸 中村さつき
梅雨に入り猛暑の続き明けより豪雨災害年中夏は

土穴 瀧口 敦子
広々と続く富浦田風吹きて紋白蝶のみえかくれ

津屋崎 佐々木和彦
ため池のなかは波の荒れれてみておは清らか丘より見えて

自由ヶ丘 調 貞子
手術しつぎまな姿になるよりと亡き夫のもとへ友は逝きたり

田野 森 つるの
豪雨警報の出でたる中の旅立ちを気遣ふ夫に負けて中雨垂れ

吉留 高山 信子
移し植えし鈴蘭のさま来てみればそは降る雨に息づく如し

徳重 石松や寿子
再びは行く日あるまじ核員二十年前拾ひし還子に

福岡 池浦千鶴子
台風にいたぶられたる茄子胡瓜傷つき乍ら太りある

名古屋 小田 留子
くちなしの白花々咲きそめて梅雨の晴間は匂えり更に

鐘崎 安永 久子
哺育器を離れて早も三年か女孫はしっかり自己主張する

田野 森 甲子
半身の麻痺にもめげず真剣に編機を使ふひとりの乙女

曲 天野 玲子
家庭科は苦手と言えぬ嫁なれど煮物の味のうまくなりたり

池田 小田 イセ
朝あさなちぎる胡瓜の瑞みづし蘭音もさやか味も一人

八幡西 有吉 陽子
海見ゆる斜面の岩肌荒々し立つ白波の輝き映ゆる

福岡 一宮 末子
藤の花下がる姿の美しく我が身の姿もかくそ有りたりし

宇美 美男 巨
半数はいくさに死せりクラス会の十四年兵われら喜寿を過ぎたり

福岡東 板矢 美春
待ちし日晷を撫でし三りんのカサブランカ開く白い雨垂れ

社務日誌抄

- 七月一日 月次祭 八幡西 高校ニュージランド 留学生十四名来社
- 七月三日 宗像大社氏子会 評議員会
- 七月四日 宗像大社責任役員会
- 七月六日 北九州署月報寄神社望月司郎様其他十七名参拜
- 七月七日 ドイツ鉄道(株)ランアブルク州グループマネージメント代表 ハンス・ライスター氏 他三名来社
- 七月八日 広島県神社庁広島支部部長渋谷建氏他二十四名参拜
- 七月十一日 宗像海運(株)玉元一氏 大和海運(株)三浦照輝氏参拜
- 七月十三日 宗像大社菊花会運営理事会
- 七月十五日 月次祭 祇園祭
- 七月十九日 宗像護国神社 千灯明打合せ会
- 七月二十日 玄海町老人クラブ一〇〇名清掃奉仕
- 七月二十三日 若松白山神社舞姫会十名来社
- 七月二十五日 弘済被服(株)代表取締役社長藤倉好雄氏、アカツキ商事(株)九州営業所所長浅野毅氏他一名参拜
- 七月三十日 出光興産(株)山梨油所副所長石田和文氏他一名参拜
- 七月三十一日 大坂式・夏越祭

残暑御見舞申し上げます

美松タクシー有限公司

代表取締役 塩川 弘昭
TEL 〇九四〇一五二一〇〇一五

大和印刷

代表取締役 的場 重徳
宗像市大字田熊五二六二二
TEL 〇九四〇一三六二二〇二七

株式会社 弘江組

取締役会長 中野 弘愛
代表取締役 花田 和彦
福岡県宗像市大字稲元一〇二五
TEL 〇九四〇一三二五七三二一八

宗像グリーン株式会社

代表取締役 瀧口 潤一郎
福岡県宗像市大字稲元九〇五
TEL 〇九四〇一三三二二二七

フォトスタジオ一勢

代表 山下 誠治
福岡県宗像市田熊一八〇一六
TEL 〇九四〇一三二五九六三三三五

宗像大社歌会 俳句作品集 四二二

福岡 二宮 末子
ボス鳥す二羽とまっつて何話
す

若松 高橋 忠實
直里の憑奈目て便ぶ

自由ヶ丘 細川 桐子
職人の指先おとる藍の秋

小笹 山下しづえ
雲天に泣くか笑ふか蟬時雨

日の里 花田いつ枝
雷の一喝語を聞きもらす

藤 沢 井上 団平
それぞれに装い凝らし海の
家

東 郷 吉武 湧泉
手花火に七色童の顔ほてる

東 郷 中野 きみ
梅雨晴間醫院に残る忘れ傘

東 郷 吉田 鈴子
植田風一人の吾をバス運ぶ

東 郷 吉田 亨子
遠花火消えたる後の間深し

東 郷 三浦孝代
夏木立月まき夜の静けさに

東 郷 有吉里智子
病院の窓明りして遠花火

東 郷 田中 雨葉
七夕竹記憶の中に父が伐る

東 郷 木原 房子
留守電に吾の声あり柿若
葉

(続) 次ノ寄物

119

藍島を歩く (二)

北の千畳敷はその名が示すように、広い海蝕台状になっている。千畳敷の東側に貝島、西側に姫島がある。千畳敷の海蝕台にも二枚貝の化石がいたるところに見られる。その化石が貝島では多量にみられ、島名もなっている。

貝島も姫島も千畳敷とは陸つづきであったのが、海蝕台が浸食を受けて水路状になっているが、千畳敷には島を渡る事が可能である。帰りの時間と、潮が満ちてきたので、島には行かなかった。

千畳敷付近を歩いてみた。漁船の残骸や流れ木類の漂着をはじめ寄つた然の空気が吹き寄せられた発砲スチロールやビニール、プラスチックも多量にみられた。砂地の運搬を少し注意して六歩と、古墳時代の須古歩と、土師器片を三片ほど拾った。その周辺に生活跡があるのだから、

藍島本島には古墳が十ヶ所ほど確認されている。貝島には集中して十三基の古墳がある。一九六九年(昭和四四)に、島に植物園の計画ができたため、北九州市教育委員会では、そのうち古墳三基の発掘調査を行ったのである。一号墳、四号墳、十一号墳である。十一号墳は盗掘を受けて、副葬品の出土はなかったが、一号墳と四号墳には須重器、刀剣、鉄鏝等の武器類と共に鉄製釣針、鉄鏝、海藻採取用鎌の漁具が出土した。それらは、この古墳の被葬者が海人集団であることを示唆している。調査を行った山中英彦は出土した遺物から、時期を

六世紀頃と推定した。また本島内の古墳や遺跡調査から、島には六世紀から後半までの期間しか島には住まず、それ以降約一〇〇〇年間は無人島となり、江戸時代の十七世紀前半に長門から海士がすみついたという。山中は更に貝島から出土した海貝が海人集団の島で、しかも響と玄界灘の間に位置する要衝の地であることから藍島は、日本書紀(神功皇后撰政前記)の新羅を伐つて登壇する景行天皇の御宇の島ではないかと推定した。次の文は井上光賢監訳の日本書紀(中央公論社)からの引用である。

「秋九月の庚午の朔日卯に諸国に令して、船舶を集めて戦争の準備に入つた。皇后は神のみことだとわたり、すぐに大三輪社を立てて刀を奉られる兵士を集めるが困難であつた。皇后は自然に集まつた。そこで、吾妻海人島摩呂といふものを、西海、朝鮮への航路に連れて、国があるかどうかを視察させた。

島摩呂は帰還して「国は見えませんが」と申し上げた。さらに磯鹿の海人、志賀島の海人、阿曇氏の名を草というものを遣わして視察させた。何日かたつて帰還すると「西北方に山が横たわつて、その間に雲が横たわつています。おそろしく国がある。おそろしく国がある。おそろしく国がある」と申し上げた。という部分である。

藍島は日本書紀仰天天皇八年に、筑紫行幸した際、岡原主の浦の祖である熊鷹が山口・防府市佐藤藩の沙原の浦に出現し、魚塩の地(御料の魚や塩をとる区域)を献上した。その中に没利嶋(山口県下関市六連島)と阿閉嶋(藍島)が入つている。

藍島は新宮にもある。今は相島と書くが、筑前国続風土記には阿閉島、吾妻島、阿閉島、相島とも書くといふ。新宮相島のナガイハマには三九基の積石塚群がある。大海人集団の墓地



千畳敷と貝島

青柳種信著 瀛津島防人日記(上巻ノ三)

猶神官の内には阿曇氏と称これ彼あり。
神垣のあたりより、東の海つらを見れば、香椎潟の潮半のうら見わたされておもしろ。
こなたの磯にはあま小舟多くつたり。
志賀の磯小舟つらなへ放りそ(磯のありそ)意磯のうへにたまも玉藻か(刈)る見ゆ也良の崎も近けれど、霞こめたり。磯亭はいづとといへど、心あてにもみえず
養護たちかくしたり

から(唐泊)の二能遊のうら浪見ましものを、鷹島・可也(の)山もほど近く見ゆ。けふは、宗像郡の大崎までとおも。浪たかければとて、櫓屋郡なる阿閉嶋(相ノ島)にと(迫)まる。
こ、にも嶋長立出、やどりに率てゆく。人々ともなひ、山にのぼつて福岡のかたをみれば、そここまなしわたつとも
心あんな浪の立さ(隠)ふべしや
わき(吾妻)へのあたり



嶋のうしろの岸、浪の打入とこに、大なる岸崩あり。十ばかりの岩の懸道をつたり、からくつて窟の口に行たり。
磯の岩むらに、浪のよするもすさまじ。沖より、種小舟あまた漕つて来り、ほどなく、里かき磯に網引す。舟をおし出見しゆく。瀛のかたなる海士も、舟の上になつたり、手漕してま(舞)ふ。
辺つかなるあ、網子等、幸あり、と、つつ、諸声にひ、海の中てりわたりて、金をしけるが如し。武民あまりの鯛の赤くれ(を)を、さわさわに引よせ挙て、一三ツ舟のうちに投入たり。

残暑御見舞申し上げます



宗像大社神酒
宗像大社神酒
宗像大社神酒

福岡県宗像市大字武丸一〇六〇
合資会社 伊豆本店
伊豆善也

九州事業部
取締役 大 力 重 治
事業部長

福岡県粕屋郡新宮町大字立花口(三)五七
TEL 〇九二一九六三〇一(一)代

暮らしの夢を大きくひろく
株式会社 城山家具
代表取締役 寺 田 修

宗像市大字三郎丸五一九一
TEL 〇九四一三三三二五三三

鮮魚仲買 有限 卸・小売業 会社 やまえ水産
会席、仕出し、鉢盛御用命に応じます
代表者 安 部 實

宗像 郡 玄海町 神湊
TEL 〇九四一六二一〇〇〇六

事務機・文具・オフィス家具
株式会社 サンクス
代表取締役 藤 井 俊 孝

宗像市東郷一〇九一―一三
TEL 〇九四一三三二一五〇

SANCS